

野幌森林公園における クロテン *Martes zibellina* の初記録

ひら かわ ひろ ふみ
平 川 浩 文

(2007.12.18 受理)

野幌森林公園においてクロテンが記録されました(写真-1)。記録は自動撮影によるもので、撮影日時は2004年11月18日午前1時44分、場所は野幌森林公園の南、林道「西1号線」上です(図-1)。野幌におけるクロテンの確実な記録はおそらく初めてですので、詳細を報告します。



写真-1 野幌森林公園で2004年11月18日午前1時44分に撮影されたクロテン *Martes zibellina* (数字は、写真に写し込まれた日付の一部)。



図-1 2002年から2004年までの調査における自動撮影装置の設置地点、およびクロテンの撮影地点。撮影地点の経緯度は、北緯41° 01' 43.65", 東経141° 31' 16.87"。

クロテンの撮影状況と関連情報

クロテンの写真は、野幌森林公園において2001年から2004年まで行った自動撮影による野生生物調査の中で得られました。3610枚の野生生物(哺乳類と鳥類)の写真を得た中で、クロテンの写真は1枚のみでした。一方、ニホンテン *Martes melampus* は1枚も撮影されませんでした。写真では、頭から体にかけての明るい色に対して尾が黒い特徴からクロテンと判断されました。

この調査では、自動撮影装置を林道脇の木に高さ約220cm、俯角約45度で林道に向けて設置し、林道を移動する動物を検知・撮影しました(平川・佐々木 2003)。林道を散策する人の撮影を避け、またフィルム消費を抑えるために、装置は夜の低照度下でのみ稼働するように設定して使用しました。

調査は、2001年には北部・中部・南部の3地区の林道沿い、それぞれ3、3、4箇所、6月、8月、10月に1回4週間前後の調査を実施しました(平川・佐々木 2003, 表1)。2002年以降は、公園南部の林道沿い10箇所(図1)に場所を移し、2002年には7月から12月まで20週間、2003年と2004年には5月から12月まで32週間、連続して調査を行いました(表-1)。これまで記録された哺乳類はユキウサギ・エゾリス・シカ・キツネ・タヌキ・アライグマ・イタチ・イヌ・ネコ・コウモリ類で、これに今回のクロテンを入れると計11種群になります。

野幌では1930年代以降これまでクロテンやニホンテン確認の文献記録はありません(犬飼 1936; 井上 1976; 門崎 1981; 村野 1999)。また、野幌の自然に詳しい関係者に尋ねても、クロテンやニホンテンの確実な観察記録はないということでした(元開拓記念館学芸員: 門崎尚昭さん、酪農学園大学野生動物生態研究会: 的場洋平さん、元北

表一 野幌森林公園における自動撮影調査の概要

年	調査期間	調査 日数	設置場所と台数	のべ稼働 時間(日)	有効 撮影枚数
2001	6月9日－7月11日	31	北3・中3・南4	103	290
	8月6日－9月4日	29	北3・中3・南4	108	245
	10月14日－11月8日	25	北3・中3・南4	133	111
2001	2001年3回調査計	85	北3・中3・南4	344	646
2002	7月16日－12月12日	149	南10	1372	809
2003	5月8日－12月3日	209	南10	2047	1219
2004	5月7日－12月3日	210	南10	2024	936
	4年間調査計	653		5787	3610

注1：のべ稼働時間は、日没から日出までの稼働時間合計を24時間(日)単位で表現。

注2：2001年の設置場所については、平川・佐々木(2003)を参照。

海道野幌公園事務所：永安芳江さん、私信)。ただし、同公園のボランティアレンジャー大槻日出男さんは、1999年9月頃に大沢口近くでテン類の姿を目撃、また2002年3月8日にはカツラコース近くでテンらしい足跡を観察し、記録を残しています(大槻日出男さん私信)。

撮影されたクロテンの由来は？

平川・佐々木(2003)は野幌にはテン類が生息していない可能性が高いとし、考えられる理由として、野幌の森林が孤立していることを挙げました。森林性の強いテン類にとって野幌は孤立した生息地であり、森林そのものは生息に適していたとしても、孤立状態でテン類の集団が維持されるにはその森林面積(2051ha)は小さすぎると考えたのです。しかし、今回クロテンの存在が確認されました。このことは何を意味するのでしょうか。

1930年代以降これまで記録がないことから見て、はるか昔から現在まで野幌にクロテンがずっと生息し、世代を重ねてきた可能性はきわめて低いと思います。世代を重ねるためには、一定数以上の個体からなる集団が維持されることが必要です。野幌のように人(特に自然愛好者)の出入りが多い森林で、そのような集団が、記録がある70年以上もの間、完全に人の目を逃れてきたことは考えにくいからです。したがって、クロテンは1930年代以前に野幌丘陵の森林から姿を消し、その状態が最近まで続いていたことはまず確実です。クロテンが姿を消した理由は、明治以降の開拓・開発の歴史の中で野幌丘陵の森林が孤立化を深め、集団を維持できなかったためであると考えられます。

今回クロテンが撮影された背景について残される可能性は、近い過去に外部からクロテンの移入があったことです。移入が人為か、自然かは分か

りません。人為を想定する積極的な理由はありませんが、その可能性を否定することもまだできません。一方、移入が自然であったとすれば、野幌森林公園が周辺の森林から完全に隔離されず、移入の経路・可能性はまだ残されていたこととなります。この場合、周辺の森林や緑地・河川の分布から見て、国道274号線や36号線、道央自動車道などを挟みながらも緑地が近接してつながる南(恵庭支笈方面)の森林地域から侵入した可能性が疑われます。

自然の移入がまれにあると仮定したとき、そうした個体が定着し、さらに番(つがい)を形成して繁殖に至る可能性はあるのでしょうか。北海道大学中川研究林で行われたラジオテレメトリー調査によれば、クロテン6個体の行動圏面積は50haから178haの範囲でした(Miyoshi and Higashi 2005)。これからみると、野幌森林公園には移入個体が定着できる十分な広さがあることとなります。したがって、今回撮影された個体が一時的に野幌森林公園内に入り込んだ個体ではなく、すでに野幌森林公園内に定着している可能性も考える必要があります。さらに、Miyoshi and Higashi(2005)ではクロテンが雌雄共に分散する可能性が示されていることから、今回撮影された個体が、野幌森林公園内で生まれた個体である可能性も否定できません。

しかし、たとえ移入してきたクロテンが定着し、また繁殖が行われていたとしても、それは一時的なもので、今後長期間にわたって継続的に世代を重ねていく可能性は低いと思われます。なぜなら、近年になって野幌の森林環境にクロテンの生息にとって好ましい状況が生じたとは考えにくいからです。

大槻日出男さんによる姿や足跡の目撃がクロテンであったとすれば、少なくとも今回の記録の4～5年前から野幌森林公園内に継続的にクロテンが生息していた可能性があります。あるいは、ときおりクロテンが侵入してはいなくなることを繰り返しているのかもしれません。

結局、現段階では、撮影個体がどういう背景をもつ個体が明確なことは何も言えません。以上のようなさまざまな可能性を考慮しつつ、今後、野幌森林公園内におけるクロテンの動向を見守る必要があると思います。

クロテン記録が意味するもの

最後に、今回記録されたのがニホンテンではなく、クロテンであったことについて考察します。ニホンテンは北海道においては外来種で、養殖業者が太平洋戦争前に本州から持ち込んだものが逃げ出したり、終戦間際に餌不足から野外に放したことが起源とされます（犬飼 1975, 門崎 1996）。ニホンテンが在来種クロテンを駆逐しつつ分布を広げた結果、現在、石狩低地帯の南西部、すなわち渡島・檜山・後志・胆振地方にかけてはすでにニホンテンの分布域だとされています（門崎1981, 1996; Murakami and Ohtaishi 2002）。実際、中山峠近く、札幌市奥定山溪で2000～2002年、2004～2007年に行った自動撮影調査で撮影されたテンはすべてニホンテンでした（未発表データ）。札幌市羊ヶ丘にある森林総合研究所実験林内では1997年2月に1頭のクロテンが飼育中のユキウサギ2頭を襲って記録されましたが、2000年および2003年冬季に実験林内でリングを餌として行われた自動撮影調査でも、2005年以降夏期に行われた自動撮影調査でも、記録はすべてニホンテンでした（平川 2007）。今回野幌で記録されたのがクロテンだったことは、（もしこれが自然の移入によるものだとすれば）恵庭支笏方面の森林にクロテンがまだ生息する可能性も示唆します。今後、この地域におけるニホンテンとクロテンの動向にも注意が必要です。

関連情報を頂いた門崎允昭さん、永安芳江さん、的場洋平さん、大槻日出男さん、村上隆宏さん、三好和貴さんに感謝の意を表します。

（森林総合研究所北海道支所）

引用文献

- 平川浩文・佐々木尚子（2003）野幌森林公園内で自動撮影されたコウモリとその他の哺乳類。野幌研究2：1－8。
- 平川浩文（2007）1997年札幌市羊ヶ丘におけるクロテン（*Martes zibellina*）の記録とその意味。北方林業59：101－104。
- 井上元則（1976）野幌国有林内外の野生動物について。札幌林友186：143－156。
- 犬飼哲夫（1936）野幌国有林内の動物調査書。改訂増補第二版。北海道林業試験場 pp. 48。
- 犬飼哲夫（1975）北方動物誌。北苑社。pp. 152。
- 門崎允昭（1981）動物相の現況－哺乳類・鳥類・爬虫類・両生類－。北海道開拓記念館報告 第6号「野幌丘陵とその周辺の自然と歴史」：25－38。
- 門崎允昭（1996）野生動物痕跡学事典。北海道出版企画センター。pp. 303。
- Miyoshi, K. and Higashi, S. (2005) Home range and habitat use by the sable *Martes zibellina brachyura* in a Japanese cool-temperate mixed forest. Ecological Research 20：95－101。
- Murakami, T. and Ohtaishi, N. (2002) Current distribution of the endemic sable and introduced Japanese marten in Hokkaido. Mammal Study 25：149－152。
- 村野紀雄, 1999. 自然ガイド 野幌森林公園。北海道新聞社。pp. 159。